神 山 町 の 峠 道

民俗班（徳島民俗学会）　橘　　禎　男[1)]

1．はじめに

神山町は、昭和30年（1955）に阿野、鬼籠野（おろの）、神領（じんりょう）、下分上山（しもぶんかみやま）、上分上山（かみぶん）が合併して誕生した総面積174.18㎢の町である。山地面積が、全体の約83％を占めていることから分かるように、町の中央を北東へ向かって流れる鮎喰（あくい）川をはさんで、変化に富んだ山地が広がっている。東は徳島市、佐那河内（さなごうち）村、南は上勝町、木沢村、西は木屋平（こやだいら）村、北は美郷（みさと）村、鴨島町、石井町の八市町村と接しているが、それらの境界はすべて山の尾根上にあり、その中に東宮（とうぐう）山、雲早（くもそう）山、旭ノ丸など1,000mを超す高い山々がある。

交通路は、国道438号が町の中央を東西に横切り、それと交わる国道193号が、西部で美郷から入り木沢へ抜けている。そして主要地方道の神山鮎喰線、石井神山線、鴨島神山線などが国道につながり、東の徳島市と佐那河内村、西の木屋平村、南の木沢村、北の石井町に通じるルートには、合計五つのトンネルがある。

今回の調査は、徒歩が主な交通手段であった時代の峠道に焦点を当てて、そのルートと現状、峠道に残る石造物を中心とした民俗資料を明らかにするために行った。現地調査は、主に平成11年９月27日から12年１月14日までの間の11日間である。

2．神山町の主な峠（図１）

１）大桜越　280m

明治43年（1910）に入田（にゅうた）から広野を経て上分上山に通じる道が完成するまで、徳島と上山を結ぶ本街道が通っていた。峠には、「内町五斗組　昭和十年三月　福島竹蔵　福島　仲」の銘がある倶利伽羅（くりから）不動明王や常夜灯と剣山遥拝（ようはい）所があ

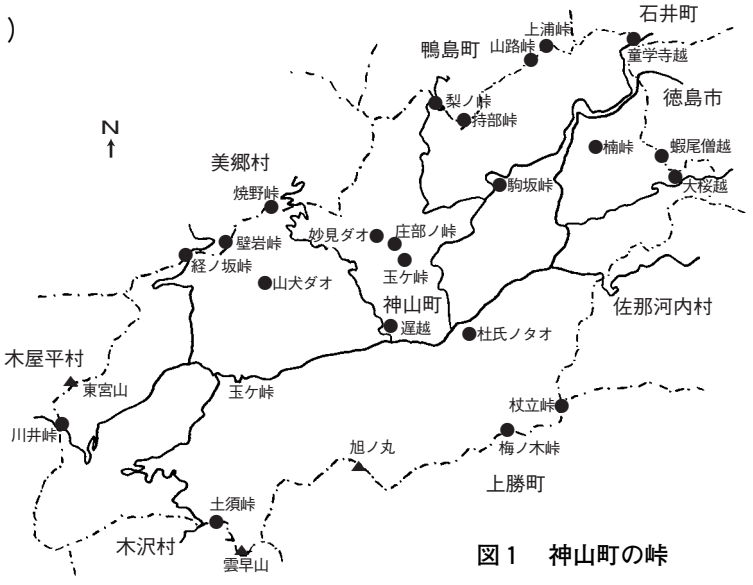

図１　神山町の峠

１）徳島市国府町日開42-5

る。峠の春は桜の花につつまれて、往時のにぎわいをしのばせてくれる。昭和36年（1961）に開通した大桜トンネルが峠の下にある。

2）楠峠（くすのき）　210m

広野の臼嶽（うすだけ）と名田河（なだこう）を結ぶ峠。現在は廃道となっている。承久の変（1221）後、守護小笠原長経に攻められた佐々木高兼一行が、鳥坂（とっさか）城から一ノ坂へと逃れる時越えたといわれている。「右　上山佐那河内道　左おとしくら」と刻まれた道標（図２）がある。

図２　楠峠の道標

3）蝦尾僧越（えびそう）　350m

峠名は、入田側にある「えびそう」という小高い山に由来する。行者野（ぎょうじゃの）と猪ノ頭（いかしら）、入田と一ノ坂を結ぶ道があった。明治14年に建てた不動明王がある。神山森林公園から峠を経て東竜王山に通じる道路建設で、崩れた山腹にセメントを吹き付けたため、峠の西側は殺風景となったが、春の南東斜面の山桜は見事である。

4）童学寺越（どうがくじ）　155m

県道石井神山線が、大正３年（1914）完成のトンネルを通っているが、現在さらに下に新トンネルを建設中である。弘法大師ゆかりの寺名をもつ峠であるが石造物はない。

5）上浦峠（かみうら）　265m

広野の倉目（くらめ）と石井町上浦を結ぶ。丸松峠ともいう。石井、鴨島へのルートとして、佐那河内や鬼籠野の人もよく利用した。神山側は廃道になっているが、自然林の中の谷沿いの道は、峠道の雰囲気を残している。峠の神山側に、石積みの野雪隠（のせっちん）（図３）が残っている。現在の公衆トイレに当たるもので、保存状態も良く民俗文化財として価値がある。

図３　上浦峠の野雪隠

6）山路峠　330m

広野の倉目と鴨島町山路を結ぶ峠。広野や鬼籠野の人々が、鴨島の江川遊園地へ桜や菊人形見物に行くときに使った。また、鴨島の製糸工場へ行く娘さんが通った峠でもある。「鴨島から竹、シュロ皮、そば米等を買い出しにきていた。建築をするとき瓦（かわら）を鴨島で買い、共同で峠を越えて運んだ」と、北倉目の大集幸雄氏（69歳）が11年11月17日に話してくれた。

7）持部峠　540m

広野の持部と鴨島町を結ぶ峠。持部鉱山でとれた鉱石や薪炭、繭などの搬出に利用され、産業道と生活道を兼ねていた。峠道は残っているが石造物はない。

8）梨ノ峠　416m

阿川の広石と鴨島を結ぶ峠で、県道神山鴨島線が通る。石造物はない。国土地理院の現在の地形図には「梨ノ木峠」と記されているが、昭和36年発行の地形図では「梨ノ峠」であり、地元では今もこの名称で呼んでいる。

9）駒坂峠　120m

広野の駒坂と阿川の福原を結ぶ峠で、不動堂が建つ。不動堂には2体の不動明王と線刻大日如来の石造物がある。丸彫りの不動明王は、昭和3年の大火に遭い折損している。堂の後方にある明徳元年（1390）の板碑は、一際目を引く美しさをもつ。なお余談だが、峠近くに住む西朝男氏（73歳）宅には、舟を引くとき使用したシュロの繊維で作った綱（図4）が残っている。鮎喰川の舟運を示す資料として貴重である。

図4　舟を引いた綱

10）庄部ノ峠　550m

左右内の庄部と阿川の宇度木を結ぶ峠。終戦ごろまで竹、ウメ、カキ等の産物を担いで、二宮から梨ノ峠を越えて鴨島まで運んでいた。庄部庵が建ち、ここには弘法大師像や丁石、庚申塔などの石造物があり、信仰の場となっている。左右内と阿川を結ぶ車道が通じている。

11）玉ケ峠　450m

左右内の鍋岩と阿川を結ぶ峠。十二番札所焼山寺から十三番札所大日寺への遍路道にあたり、弘法大師、弥勒菩薩、地蔵菩薩など合わせて15体の石造物がある。石造物の種類と数の多さでは県下一の峠である。

12）妙見ダオ　635m

左右内の松坂と阿川の宇度木を結ぶ峠。破損しているものを含め15基の板碑（図5）がある。このように多数の板碑がある峠は他にない。松坂の人が、この峠から梨ノ峠を越えて鴨島まで買い物に行っていた。

図5　妙見ダオの板碑群

13）山犬ダオ　770m

ヤマインドウともいう。下分の焼山から上る道と、美郷から壁岩峠を越えてきた道が、峠で合流して焼山寺へと続く。峠には、桜の大木の下に墓があり、少し離れて地蔵菩薩（図６）が立つ。林道焼山寺名ケ平線が峠を横切ったため、峠の様相は一変した。

図６　山犬ダオの地蔵尊

14）焼野峠　730m

左右内の釘貫と美郷の殿河、古土地を結ぶ峠。両地区の縁組みは多く、往来によく利用されていたが、県道神山川島線が峠の東に通じたため峠道は廃道となった。石造物はない。

15）壁岩峠　850m

焼山寺山から北東に延びた稜線が、美郷村との境に達したところにある峠。美郷、山川方面から焼山寺へ参拝する道があった。「戦前には、美郷の人がちょうちんをつけて登ってくるのが見えた」と、城川内の中山馨氏（76歳）が話してくれた。峠には、「右　剣山是より七里半　左上山道　古井講中」と刻んだ道標がある。川井峠を経て剣山へ通じる道があった。

16）経ノ坂峠　770m

上分名ケ平と美郷村別枝山を結ぶ峠。国道193号が通じる峠の神山側に、文化10年（1813）４月21日に建てた弘法大師像が祀られている。元は300mほど南に寄った旧道沿いにあった。

17）川井峠　764m

上分府殿と木屋平村川井を結ぶ峠。かって剣山登山道として、白装束の信者が列をなして越えたが、現在国道498号のトンネルが通っている。峠には「剣山道　是より百七十五丁」と刻まれた道標が立つ。また、藩政期に酒井順蔵が記した「阿波国漫遊記」に出てくる「ゆるぎ石」が残っているが、昭和21年の南海地震後ゆるがなくなったという。

18）土須峠　1,023m

自然林の中の幻想的な雰囲気をもつ峠として、登山者に親しまれていたが、昭和50年のスーパー林道工事により峠の姿は一変した。現在の国土地理院の地形図上に峠名はない。

19）梅ノ木峠　830m

神領の南野間と上勝町傍示を結ぶ峠。「梅の木峠名東名西の堺也　峠より下り坂廿丁の間其急也」と「阿波国漫遊記」にあるように、神山側は急坂で、昭和30年代までは利用していたが現在は廃道である。昭和58年、尾根道が「四国の道」として復活した。

20）杖立峠　930m

神領の南野間と上勝町正木を結ぶ峠。峠には、上勝町の藤川、梅ノ木、神山町の上角、佐那河内などの地名を刻んだ、道標の役割を持つ不動明王が立つ。また、上角から上る道筋に、「くわんじよう太き道　施主儀左衛門」の銘がある高さ45cmの道標（図７）がある。「慈眼寺」ではなく「灌頂ケ滝」の名を記したのは、寺より滝へ行く人が多かったのだろうか。

図７　杖立峠道にある道標

21）杜氏ノタオ　230m

神領の本上角にある峠。トウジガタオともいう。杜氏は、酒造り専門の季節労働者のことであるが、なぜこれが峠名となったかは不明である。峠には、明治44年に建てた不動明王と道標地蔵菩薩（図８）がある。後者には、「左　じゅん礼道　右　峯より八丁」とあり、南方にある「峯の庵」への道のりを示している。

図８　杜氏ノタオの道標・地蔵尊

22）遅越　180m

下分の地野にある低い峠。県道神山川島線ができるまで使われた。峠の南側にお堂があり、中に石像と木像の２体の地蔵菩薩が祀られている。また近くに天文２年（1533）に建てた青面金剛像の庚申塔もある。

３．神山町の峠の特徴

今回の調査では、町教育委員会発行の『神山の地名をさぐる』（神山町成人大学講座）を活用した。同書に出ている地名の中で、峠名と思われるものが43あったので、この中より聞き取りしながら調査を始めた。ただ、道を歩くことを前提としたため、限られた期間の中で、全峠を調査するまでに至らなかったのが残念である。

他町村と比較して考えられる、神山町の峠の特徴は次のようである。

１）峠の数が多い。他町村との境界上と、町内の峠数がほぼ同数である。これは山地が大部分で、鮎喰川の支流が多いためと考えられる。また、美郷、鴨島、石井など北へ通じる峠道が多いのは、交易や交流の必要性が他に比べて大きかったためであろう。

２）峠に石造物が多い。地蔵菩薩、道標、丁石等が多いのは、峠が遍路道となり、剣山道もあったためであろう。板碑のある峠が四つもあるが、これは他町村ではみられ

ないことである。

3）峠の呼び方が多様である。一般に峠の呼び方は、トウゲ・コエ・ゴエ・タオ・ダオ・ダワ・トウ・ドウの８通りあるが、神山町ではダワとトウを除く６通りが使われていた。特にダオは、山口や島根など中国地方に多い呼び方で、県下での例は珍しい。

４．峠の保存と活用

神山町も、他町村と同様に林道の延長が進んでいる。神山町の地形図を見てまずこのことを感じたが、山に入って一層強く実感した。これが、由緒ある峠の破壊にならぬよう願っている。

最近は、「癒(いや)しの道」として歩く道が注目されるようになった。美しい自然や由緒ある歴史の道、そこに残るお堂や石造物は、先祖が私たちに残してくれた貴重な文化財である。これらは、癒しを求める人々を引きつける力を持つ。高齢化社会を迎え、健康維持の目的もあって、歩くことに時間をかける人が増えた。市内に近い立地条件を考えると、遍路道や峠道を生かした、歩く道のコースづくりが求められるようになるであろう。

神山町の成人大学講座は、永年充実した活動をして、その成果は多くの刊行物となっている。これらを活用した文化財巡りのコースは、神山町の新しい魅力になると思われる。

５．おわりに

今回の調査に際して、多くのご教示を賜りました地元神山町の、中山馨、稲飯幸生、大粟玲造、大野申太郎、佐々木利文、西朝男、大集幸雄、西種男、片山泰雄、藤井邦男、森正の各氏に深く感謝いたします。

参考文献

酒井順蔵著『阿波国漫遊記』徳島史学会　昭和45年
神山町教育委員会編『神山の板碑』神山町教育委員会　昭和58年
神山町成人大学講座編『神山の地名をさぐる』神山町教育委員会　昭和62年
鬼籠野村誌編集委員会編『鬼籠野村誌』鬼籠野村誌編集委員会　平成７年
徳島県郷土文化会館民俗文化財集編集委員会編『神山の民俗』徳島県郷土文化会館　平成10年